

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報



あの町この町
トレード Toledo



特集 ブラジルのユダヤ移民

- ・ブラジルのユダヤ移民プレゼンス(その2)～実業界編
- ・ブラジルのユダヤ移民プレゼンス(その3)～文学編

0円

新規会員募集中!

詳しくは協会へお問合せください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

目次

あこの町この町
トレード [佐藤宗一] 3

ブラジル・ナウ
ドイツ移民の文化継承と観光地としての魅力
[山本綾子] 5

【特集】ブラジルのユダヤ移民
ブラジルのユダヤ移民プレゼンス (その2)
実業界編 [岸和田仁] 6

【特集】ブラジルのユダヤ移民
ブラジルのユダヤ移民プレゼンス (その3)
文学編 [岸和田仁] 8

日本の言語多様性
日本語ポルトガル語バイリンガル話者の調査から
[ティム・ラメリス] 10

ブラジル現地報告
再びデング熱の感染拡大 [コッペデひろみ] 12

新刊書紹介 13

連載・ブラジルあれこれ
建築家西沢立衛氏とオスカー・ニーマイヤー 13

連載・ビジネス法務の肝
電子ゲーム法の成立
[柏 健吾] 14

連載・勤どころ～税務&ホットトピック～
MOVER プログラムの概要
ブラジルにおけるグリーン・モビリティ・イノベーション・プログラム
[三上智大/天野義仁/リカルド・ロア] 15

エッセイ
ブラジルプチンに魅せられて四半世紀
[中津雄春] 16

最近のブラジル政治経済事情 17

ジャーナリストの旅路
アイルトン・セナ、栄光は永遠に [高木勝悟] 17

連載・文化評論
歴史人類学者リリア・モリツ・シュワルツ教授
ABL(ブラジル文学アカデミー)新会員へ
[岸和田仁] 18



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」
「コンデンスミルクがたっぷりの、甘い「プチン」やケーキたち。青空の下にはカラフルな小旗がひしめき、子どもたちが民族衣装で踊っていた。6月はフェスタ・ジュニーナの季節。カトリック聖人の日も重なり、ブラジル各地でお祭りがある」
永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(備成社)等。www.hikarunphoto.com

あの町、
この町

トレード Toledo

トレードという町の名前からは、世界遺産に登録されているスペインの古都トレードを思い浮かべるが、ブラジルのパラナ州西部にもトレードという名前の町がある。パラナ州の州都クリチバに駐在していた2008年前後、何度か同市に出張した。トレードはクリチバの西方約540kmに位置し、クリチバから車で約7時間かかる。出張目的は、同市の日系人団体を訪問し、親睦を図るとともに、日系社会の状況を把握すること。因みにパラナ州は、サンパウロ州に次いで日系人の多い州であり、州内の多くの町に日系人団体が存在する。



トレードは比較的新しい町である。「イグアスの滝」があるフォス・ド・イグアス市から分離し、トレード市が創設されたのは1956年。同地への入植が始まったのは1946年で、最初の入植者はリオグランデ・ド・スル州の農民とされる。

人口は約15万人。土地は肥沃且つ平坦、穀物栽培が盛んであり、パラナ州では有数の穀物生産地である。このため農牧業分野の企業が集積しており、農業ビジネスが市の主要経済になっている。また、同地を流れるサンフランシスコ川には滝や急流など風光明媚なところが多く、将来の観光開発が有望視されている。主要観光スポットの一つは1988年オープンのDiva Paim Barth エコロジー・パークだ。園内には、森や湖、水族館、動植物園、ウォーキングコースなどがあり、市民の憩いの場になっている。



市の最大のお祭りは Festa do Porco no Rolete。豚の回転焼きフェスタとも言えるだろうか。串刺しにした豚を回転させながら丸焼きにし、その肉を賞味するという食のフェスタだ。この祭りには毎年何万人もの人が訪れる。

トレードには「トレード日伯協会」という日系人団体が存在する。日本人が住み始めたのは1958年だが、日系住民の数は僅かであり、2008年当時、100家族に満たないと推定されていた。数は少ないが、日本文化継承に務めるなど、良き市民として存在感を示してきたところ、市は2008年の日本人ブラジル移住100周年を記念し、「日本広場」を建設した。道路のロータリーの中に建設された小さな広場だが、池と太鼓橋が設けられ、池には金閣寺の模型が設置され、鯉が放たれた。2009年7月、夕陽迫る中で行われた落成式の感動的な情景は今でも目に浮かぶ。日本広場は照明に照らされ暗闇にくっきりと浮かび上がり、その中で市長が述べた祝辞の一文が「日本人及びその子孫は市の発展に多大な貢献をした」。



↑ Diva Paim Barth Ecology Park

佐藤宗一 (協会理事)

広島から Tudo Bem?

サンバの汗と笑顔、はじける5年ぶりに大通りをパレード

日伯友好のパレードが5年ぶりに。広島市最大のイベント「フラワーフェスティバル」の会場となった平和大通りで披露された。サンバ連合ホーザ・ジ・ヒロシマ（小畑浩代表）と広島日伯協会の共催。コロナ禍を超えて5年ぶりの平常開催となった同祭は過去最高の180万人（主催者発表）を超えた。

初日5月3日にパレードが行われ、音源車から流れるサンバのメロディと、打楽器隊が刻む迫力あるリズムが雰囲気を盛り上げた。ブラジル人も多く参加したダンサーらの艶やかな姿には、沿道からも大きな拍手や声援が飛んでいた。

小畑代表は「チームは多くのブラジル人も参加している。まさに日伯友好の証となった」と、笑顔で汗を拭いた。

パレードに初参加した広島日伯協会の辻井事務局長は「他の団体に比べてもサンバはやはり映えますね。今後も共催事業として盛り上げていきたい」と笑顔で意欲を見せていた。



▲パレード後に全員で記念撮影

5年ぶりに県庁を正式訪問 湯崎知事と笑顔で関係確認

ブラジル広島文化センター（ブラジル広島県人会）の村上佳和・ことし副会長夫妻が広島に里帰りし、5月20日、5年ぶりとなった公式訪問を果たした。湯崎英彦県知事と意見交換、しばしの歓談を楽しんだ。

広島日伯協会の田中秀和会長、辻井克利事務局長が同席した。湯崎知事からは昨今のセンターの活動について質問があり、広

島県が県人会の子弟を対象に延べ10人が参加した後継者育成研修などが話題に上がった。来年、センター創立70周年の節目を迎えることから、村上副会長は式典や記念事業を計画していることを伝え、訪問を呼びかけた。

村上副会長は「県の支援とつながりがあってこそ。直接訪問コロナでしななかったが今後継続されれば」と笑顔を見せていた。



▲（左から）辻井事務局長、田中会長、村上夫妻をはさんで、湯崎県知事

JICA 研修 お好み焼きと尾道帆布をブラジルに

本年度の JICA 日系研修で広島に滞在している森本リサンジェラ直美さんと、植西ジジャケリーネ夢さんが、広島日伯協会を訪問した。

森本さんは3週間滞在し、お好み焼きの研修を行う。ブラジル広島文化センターのイベントなどで成果を披露する。

植西さんは、「伝統的産品を活用した地域ブランドの創出と地域の活性化コース」で尾道帆布の技術を半年間学ぶ。

二人とも流暢な日本語を話し、研修への意気込みを述べた。

田中会長は「二人のやる気がしっかり伝わった。ブラジルで広島の文化をしっかりと伝えて欲しい」とエールを送っていた。



▲（左から）森本さん、田中会長、植西さん



広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター（県人会）と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長（6代目、2020—）は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。



ドイツ移民の文化継承と観光地としての魅力

今年のイースターは、パラナ州クリチバから車で約3時間半をかけて、サンタカタリーナ州のドイツ移民の街、ポメロージを訪れた。ドイツ本国の次に大規模といわれるビール祭り「オクトーバーフェスト」で有名なブルメナウから約30kmと近い。州道に入り目的地に近づくと、次第にドイツ語併記の大きな看板や公共標識、ドイツ建築の建物が目に入るようになる。

ポメロージはもともと観光地だが、ここ数年は世界最大のイースターイベントの開催地として話題を集めている。わずかに人口約3万人の街で世界最大とは、この国お得意の“言い回し”だと受け流していたが、造り物のイースターエッグの大きさと、イースターツリーに飾られる本物の卵の殻の数がギネス世界記録に認定済とのことであながち嘘ではなかった。高さ16.72m、直径10.88mの巨大卵のアートワークは毎年変わり、今年はドイツ移民200周年記念として、ポメラニア^(注)移民のカール・ウィーゲ家の邸宅（1920年築）やシーボルト邸（1913年築）などの木骨造りの家屋をモチーフとしている。ポメロージには、現在もドイツ人入植時代の典型的な建物が約250戸存在し、ヨーロッパ以外で木骨造りの家が最も多く集中している地域という。そのうち50戸以上が並ぶ Rota do Enxaimel は観光ルートにもなっている。ドイツ建築をコテージ風に建て、敷地内で乗馬などができる宿泊施設もあり、そこでは初期移民の暮らしを体験できる。日本でも注目されて久しい「体験型観光」の企画に妙に感心してしまった。南部の数々のドイツ村が観光地として成功している訳こそ、このドイツ建築にあるとつくづく感じる。（注：ドイツ北東部からポーランド北西部にかけて広がる地域。ポメロージは同地域からの移民が多く、地名の語源でもある。）

さて、今年是最初のドイツ移民が正式にブラジルの地を踏んだ1824年から数えて200年。日本移民の84年先輩にあたる。最初の入植地はブラジル最南端リオグランデ・スル州、続いて南部各地に街を築き、19世紀後半になるとエスピリトサント州など南東部にも入植地を広げた。DWIH（ドイツ科学・イノベーションフォーラム）によると、2024年現在、ブラジルに暮らすドイツ系は全人口の約5%、1,000万人以上に達し、昨年の日本の外務省推計で270万人と公表された日系ブラジル人の約4倍である。

200周年を祝うイベントは、サンパウロでは移民博物館などで大々的に行われているが、筆者が暮らすクリチバから南部に目を向けると、ポメロージのように自治体レベルで開かれるイベントが非常に多い。毎年行われる様々なイベントを周年記念としてさらに盛大に行っている例も多い。内

容は、民族衣装をまとったグループによる踊りや音楽、ドイツ料理、ドイツビールが定番で、ブラジルの地で継承されてきた数々の文化を通じて盛り上がるという点では、日系イベントと大差はない。ただ、ドイツ建築が集積する街の中心や広場で開催することで、まるでヨーロッパに旅行したような感覚を与えてくるアドバンテージは大きい。日系人が多い街にも、どこか静かに佇む鳥居や日本庭園、時には瓦屋根の会館があったりもするが、日系イベントとなると閉鎖された展示会場や日系団体の施設などで開催されることが多く、インパクトでは各段の差を感じる。

また、ポメロージの目抜き通りには、ドイツ初期移民の暮らしぶりを伝える郷土資料館、Museu Pomeranoがある。こうした資料館は大なり小なりドイツ移民の街にあるが、ここでは農機具や工具に加え、主に20世紀前半に使われていたアンティークな木製家具や絵付けがされた陶器、ガラス製の食器、楽器などの展示が整然と置かれていた。シンプルながらもわずかな余裕を感じる小綺麗な田舎暮らしを見せている。一時期、筆者がボランティアをしていたサンパウロのリベルダージにある日本移民史料館には、日本移民史の象徴的な展示「移民小屋」があるが、あの薄暗く重々しい印象とはかけ離れた暮らしぶりを見せつけられるよう若干居たたまれない気持ちになる。

ドイツ人の入植当初も生活環境は劣悪で定住状況は良好とは言い難かった。ブラジル政府からの財政的援助もすぐに打ち切れ、移住者たちは益々孤立していったといわれる。その一方で、ドイツ移民は街作りに必要な大工や農家など職人のほか、商人、宗教家、教師などで構成され、他集団との接触の少ない閉鎖的な集落で街を創設した。ドイツ語の継承もドイツ移民の特徴で、移民開始のわずか8年後の1832年にはポルトアレグレでドイツ人子女向けの最初の教材が出版され、各入植地では学校もいち早く建てられた。特に南部では、ヨーロッパと似た気候の土地でドイツ語（正確には多様な方言）のみで暮らす小ドイツを彼方此方に確立していったといえる。

頭のイースターの旅行に話を戻すと、宿は中心地から徒歩圏内、その名の通りドイツ人が切り開いた Rua dos Imigrantes の奥に位置する Casa Magdeburg に宿泊した。宿の名前はベルリンから約150km西、オーナー曾祖父の出身地とのことだった。

山本綾子

（「ブラジル・カルチャー図鑑」編著者、UnB 観光学専攻修士課程修了）

ブラジルのユダヤ移民プレゼンス(その2)

～実業界編

岸和田 仁 (『ブラジル特報』編集人)

ブラジルの実業界でよく聞かれる“格言”がある。それは、「ブラジルの会社はファミリー経営のところが多い。そうしたファミリー企業は、創業者が一代目として事業の基盤を固め、二代目が事業継続ないし拡大、三代目になると、事業・会社経営が傾きだし、倒産ないし会社身売りとなる。」というファミリー企業三代目没落説である。

では、19世紀末あたりからブラジル実業界で活躍し始めたユダヤ移民の事例はどうなっているのだろうか。いくつかのユダヤ移民ビジネス物語をチェックしてみよう。

クラビン家の発展史 南米最大の製紙会社グループへ

北東部ペルナンブーコ州の州都レシーフェから国道101号を80kmほど北上したところに位置しているのがゴイアナ市である。ここは、現在はステランティス(フィアット)の大型自動車工場や関連工場が集結している工業団地となっているが、筆者が通っていた1980年代は、工場といえば、昔からあるサトウキビ製糖工場をのぞけば、製紙工場くらいしかなかった。ここの製紙工場は、PONSA社とあって、クラビングループが1973年に設立したところで、以前は廃棄するしかなかったサトウキビ絞り粕を原料として紙やダンボールを加工する工場であった。この工場を含めブラジル全土に23カ所、アルゼンチンに1カ所、計24カ所で製紙工場を稼働させているのが、ブラジル最大の製紙会社クラビンである。

クラビン企業グループの創業者マウリシオ・フリーマン・クラビンが、祖国リトアニアに

おけるボグロム(ユダヤ人迫害)から逃れてサントス港に着いたのが1889年であった。彼は翌年1890年サンパウロ市内に小さな活版印刷所を開設、1899年には、同郷の親族と共同で文房具輸入製造会社(兼印刷所)を設立し、堅実経営で事業を軌道に乗せると更なる事業拡大へ邁進する。1909年には製紙工場を立ち上げ、1920年代には製紙業界で既に大手となり、1930年代には第二世代に経営権を移し、パラナ州へ進出。単なる製紙事業に限定せず、原料となる森林を所有し植林事業も広く手掛ける。自社原料を自給している製紙業者としてはブラジルではクラビンがバイオニアであったが、数十年前から環境問題にも配慮した持続可能な企業活動を志向していた。製紙原料をユーカリばかりでなくサトウキビ絞り粕の活用を具体化したのもクラビンがバイオニアであった。創業から100年以上経過したが、事業経営はプロフェッショナルに任せ、プロの投資家も引き込んで経営の更新が図られ続けている。クラビン企業グループに関しては、三代目没落説は全くあたらぬ。

宝石店チェーンH.Stern

いうまでもなくブラジルは宝石類の産出国としても世界有数であり、ダイヤモンド、エメラルド、アクアマリン、トルマリン、トパーズなどの採掘量はトップクラスである。となれば、宝石ビジネスも栄えるのは必然であり、日系人でも宝石商は少なくない。そんな宝石店チェーンでも最大規模を誇るのが、H.Stern(英語ではエイチ・スターン、ポルトガル語ではアガー・シュテルン)であり、ブラジル国内では、主要空港やショッピングセンターには必ず店舗が置かれており、その店舗数は88とのことで、世界全体では30か国に280店舗も展開している。

この品質保証システムが完備し顧客満足度が高いと評判の宝石ビジネスの創業者は、ユダヤ系ドイツ人(のち帰化ブラジル人)のハンス・シュテルン(1922-2007)である。ナチスドイツから逃れてブラジルに着いた時、彼はまだ17歳だった。生活のため、宝石店でタイピストとして雇われたこともあって、独学で宝石の勉強・研究を進め、ミナスジェ



▲H.Stern 店舗

ライスの採掘現場にも足を運んだりして“鑑賞眼”を鍛えてから、1945年、自分の宝石店を開く。1960年代には既にブラジルでも有力な宝石ビジネスマンとして知られていたが、彼自身の好みの宝石はミナス産のトルマリンだった由だ。

2007年に彼が亡くなった後は、ファミリーの第二世代(息子たち)が経営のマネジメントを担っている。

アブリル出版 南米最大の出版社の栄光と挫折

米国生まれのユダヤ系イタリア人 Victor Civita(イタリア発音ではチビタ、ポルトガル語発音ではシビタ)(1907-1990)が、サンパウロで1950年創設したアブリル出版は、出版界では新参者であったが、ドナルドダックなどのディズニー漫画雑誌(小冊子版)が大ヒットしたおかげで急成長、米国のTIME誌をモデルとした総合週刊誌VEJA(初代編集長は息子ロベルト)を1968年9月に発刊するという英断がプラスに機能し、同社は旅行雑誌、健康雑誌、Playboyブラジル版、女性雑誌、カーマニア向け雑誌等を次々と刊行し、大型印刷所も併設された本社ビルを立ち上げ、1970年代には南米最大の出版社となっていた。

1982年、ロベルトの弟リチャードが別会社を設立したことで、アブリル出版は雑誌専門に特化、リチャード率いるアブリル・クルツラ(後にCLC社)は、哲学全集「思想家たち」や経済学全集「経済学者たち」などの単行本出版や新事業(五つ星ホテル経営や営業用冷蔵庫事業、食品加工事業など)を進めることになった。

1990年社長に就任したロベルトは21世



左上:ヴィクトル・シビタ 左下:ロベルト・シビタ 右:ディズニー漫画雑誌

紀に入ってTV参入などの多角化投資・経営拡大を進めたこともあって資産が急拡大、2013年のForbes誌では「ロベルト・シビタは世界で258番目の富豪、資産価値49億ドル」と報道された。その2013年には、第三世代(ヴィクトルの孫たち)が経営権を握ったが、彼らはタックスヘイブン(租税回避地)の英領バージン諸島に利益操作・節税(実際は脱税)のためのペーパーカンパニーを複数設立する等、“裏の手”に頼ることしかやらなかった。

こうした“乱脈経営”の当然の結末として、アブリル“帝国”とまで称された、ラテンアメリカで最大のメディアグループ、アブリル出版社は、2018年8月15日、民事更生を申請した。負債総額16億リアル(当時の為替換算で約450億円)とのことだが、この有利子負債額は、同社の年間売上高の160%に相当する巨額であった。また同時期、800人に及ぶ大量解雇が事前の連絡なしに行われ、ここにはベテラン記者も含まれており集団労働訴訟紛争になっていく。また、総合誌Veja、経済誌Exame、スポーツ誌Placar、啓蒙雑誌Super Interessanteなどの主要雑誌は引き続き発行されるが、女性誌Elle、Cosmopolitan、インテリア雑誌Casa Claudia、健康雑誌Boa Formaなど10誌の休刊(実質的廃刊)が決まった。

当時の売上数字(単位:百万リアル)をみておくと、2016年売上997.3純利益▲137.8、2017年売上977.7純利益▲137.8というように二年連続の赤字決算であった。

2018年8月の民事再生申請と並行して、シビタファミリー全員の経営陣からの退任が

確定し、会社再建専門弁護士ファビオ・カルパリオが新しい社主となった。

先に述べたファミリー企業三代目没落説が、びったり当たったのもアブリル出版であった。

クルツラ書店 (Livraria Cultura)の挫折

ブラジル各地の書店や古本屋を訪れるのが楽しみであった筆者にとって、クルツラ書店というのは、特別な存在であった。パウリスタ大通りとアウグスタ通りの角地にあるサンパウロ本店もレシーフェ旧市街に2005年開店したレシーフェ支店も、新刊本の品揃えもすばかっし、英語やフランス語の新刊本も結構並んでいて、また分類もわかりやすく、探書するには最高の本屋だった。また、以前は、書店の従業員が職人気質のプロ店員で本の情報に矢鱈と詳しく、コンピューターで検索する前に、関連本について薦めてくれたり、日本の大型書店よりもはるかに顧客アテンションレベルが高く、何回も心底感動したものだ。そんな有名書店の歴史を軽く復習してみよう。

宝石商H.Sternと同じく、ナチスドイツから逃れて、ユダヤ系ドイツ人移民エヴァ・ヘルツ(1911-2001)がサンパウロに到着したのは1939年であったが、生計を助けるため、ドイツ系移民仲間を主な顧客とする貸本屋を1947年始めたのであった。その22年後の1969年息子ペドロが、パウリスタ大通りにLivraria Culturaを開店、しばらくは1店舗体制だったが、2000年サンパウロ市内に支店を複数開店、2003年にはポルトアレグレ、2004年にはブラジリア、2005年にはレシーフェ、と次々とブラジル全土に支店を増やし、2010年のピーク時には25店舗も展開するブラジルで二番目の大型チェーン書店となった。

この急激な成長路線の副作用として、急に数を増やした従業員のレベル低下とベテラン

従業員の大学退社も発生し、書籍の量は増えたが書店としての質は低下という実態が露呈していく。経営状態も悪化し、2018年には民事再生を申請、店舗数も削減され、2021年時点では15店舗、2022年には3店舗、2023年には本店のみの1店舗となってしまった。民事再生申

請は2023年2月一旦却下されたが、7月にサンパウロ地裁が承認したことから、本店での営業が再開された。

アルベルト・アインシュタイン病院 南米で最良の医療機関

“サッカーの神様”ペレーが、2022年12月29日亡くなった、とのニュースを公表したのは、彼が入院していたアインシュタイン病院であった。

あるいは、2018年9月、ボルソナーロ前大統領(当時は大統領候補)がミナス州での選挙運動中に暴漢に襲われ、腹部を深く刺され重傷を負った時、一旦入院した地元病院では対応できず、サンパウロのアインシュタイン病院へヘリコプターで緊急移送され、直ちにICUで緊急手術を施され、一命をとりとめた。

最近の二つの事例をメモしてみたが、ブラ



▲アルベルト・アインシュタイン病院

ジルの有名人がお世話になる病院といえば、ラテンアメリカでは最良の医療機関と評価されているアルベルト・アインシュタイン病院である。サンパウロには、ポルトガル、イタリア、ドイツといったそれぞれの移民コミュニティが社会福祉医療機関として創設した有力総合病院がいくつもあがるが、アインシュタイン病院は、人口規模からいうとマイノリティといえるユダヤコミュニティが総力を挙げて1971年に落成したものだ。正式名はHospital Israelita Albert Einsteinであり、1955年に設立されたSBIBAE(ブラジル・イスラエリット看護協会)を母体として病院建設が取り進められた。

ユダヤ系に偏することなく、日系のドクターも数多く働いており、2016年からは医科大学(医学部、看護学部、大学院)も併設され、医学教育にもコミットしている。その意味ではブラジルの医療水準全般をリードしている、模範的事例といえるだろう。

このアインシュタイン病院は、ユダヤコミュニティのパワーを象徴している。



▲かつてのクルツラ書店本店

ブラジルのユダヤ移民プレゼンス(その3) ～文学編

岸和田 仁 (『ブラジル特報』編集人)

岩波文庫 『世界イディッシュ語短編選』 (西成彦編訳)

ロシアや東欧諸国におけるポグロム(ユダヤ人迫害)から逃れたアシュケナージ(東欧系)ユダヤ人は19世紀末から1940年代にかけて米国、アルゼンチン、ブラジル、南アフリカなどへ移住することを余儀なくされた。

こうしたユダヤ人による文化表現活動の一端が、ディアスポラ文学と称されるイディッシュ語文学であるが、「屋根の上のバイオリン弾き」の原作『牛乳屋テヴィエ』(ショレム・アレイヘム作)やノーベル賞を受賞したイツホク・ジンゲル(アイザック・シンガー)の作品を除けば、日本語で読める作品は少なかった。2018年岩波文庫から刊行された『世界イディッシュ語短編選』は、このイディッシュ語文学の“世界性”を感得できる貴重な入門編だ。作家たちの活動場所は欧州、米国、アルゼンチン、南アフリカ、ブラジルなどだが、作家ロゼ・パラトニクの『泥人形メフル』はリオに移住した主人公がフラメンゴやコパカバーナで行商をしながら恋物語も展開していく佳品だ。コロニア文学という日本語表現のディアスポラ文学もそうだが、この作品もポルトガル語以外の言語によるブラジル文学の一篇ともいえるだろう。

この文庫本に付された解説によれば、それまで「ユダヤ語」だの「隠語」だのいわれていた、東欧系ユダヤ人が日常的に話していた言葉が、1908年8月30日から9月4日まで開催された「イディッシュ語のための会議」(於：ウクライナ西部のチェルノヴィツ)によって「イディッシュ」の名前で呼ぶことが公式に確定した。この1908年というのは、日本からのブラジル移民が開始された年でもある。すなわち、この年を起点に始まったという点では、イディッシュ語文学の歴史も日系ブラジル移民の歴史も物理的な時間軸では一緒なのだ。

ロシアや東欧諸国からブラジルへ移民としてやってきたユダヤ人は、サンパウロ、リオ、ポルトアレグレ、レシーフェ、サルヴァドルなどに移住し、第一世代は主に商人として生計を立てながら、ブラジル社会への適応に苦闘することになる。彼らの文化表現活動として一番の広がりを見せたのは、イディッシュ演劇で1910年代から50年代までブラジル各地で非ユダヤ系の観客も惹きつけながら、様々なレベルで公演されたのだ。レシーフェの場合、1920年に「イスラエル若者クラブ」が設立され、1930年代には「ペルナンブーコ・イスラエル演劇センター」や「イディッシュ演劇グループ」が演劇活動を継続、1950年代に入るとシオニズム・イスラエル建国を巡って内部対立もあって演劇活動は衰退期に入るが、ユダヤ系学生による「ペルナンブーコ・イスラエル人学生劇団」は1960年頃まで活動していた。

ペルナンブーコにおけるユダヤ移民も二世三世となるにつれ、彼らが活躍する分野は商業・金融業から自由業(弁護士、医者、学者、大学教授)や公務員へと広がっていく。1980年代にはシナゴグも放置状態に置かれてしまうが、1990年代後半以降、ユダヤ・アイデンティティー復興運動が活発になってきている。こうして時代が推移するにつれ、ユダヤ系の人たちの母語もイディッシュ語からポルトガル語へ現地化し、彼らの文学活動もポルトガル語で叙述される小説や短篇を生み出していくことになる。

ポルトガル語による ユダヤ系文学 M・シクリアル

ブラジル現代文学におけるユダヤ系作家といえば、「ブラジルのヴァージニア・ウルフ」と呼ばれるクラリッセ・リスベクトール(1920-1977)を取り上げるのが自然であるが、ここではユダヤ移民二世のブラジル文学者としてモアシル・

シクリアル(1937-2011)とアルベルト・ディネス(1932-2018)の二人を取り上げたい。

まず、作家・医学博士・大学教授として活躍したシクリアルについてメモしてみよう。



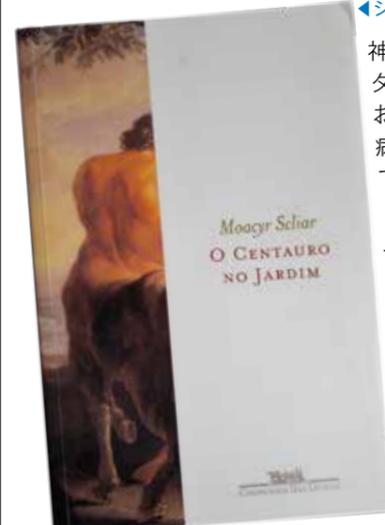
モアシル・シクリアル

ロシア革命のあとも続いたポグロム(ユダヤ人迫害)から逃れてきたユダヤ系ロシア人移民を両親として1937年ポルトアレグレで生まれたのがシクリアルであった。ユダヤ移民二世の彼は、イディッシュ語とシナゴグ(ユダヤ教会)に象徴されるアシュケナージ系ユダヤ文化に心身ともに染められた少年時代を過ごし、「ユダヤ青年運動」に挺身しながらシオニズムと社会主義との間で揺れ動く学生時代をへて、医学部を卒業し医者になる。

医者といっても開業医ではなくリオグランデ・ド・スール州政府保健局のキャリア(州公務員)として公衆衛生の現場にコミットし続け、並行して連邦大学医学部では教壇にも立っていた彼の医学研究の集大成として2002年に書き上げた医学博士論文のタイトルは「聖書から精



▲シクリアル自伝



シクリアル『庭園のケンタウロス』

神分析へ：ユダヤ文化における健康、病氣と医学であった。

ブラジル人アイデンティティとユダヤ性の間で煩悶したシクリアル青年は、文学活動によってその“心の

叫び”を表現する手段を獲得したが、小説、エッセイ、小話集、児童文学など80冊を超える著作を発表している。主な作品は、十数ヶ国語に翻訳されているが、彼の代表作とみなされている『庭園のケンタウロス』(1980年)は、在米「ナショナル・イディッシュ・ブック・センター」が選定した“過去200年間に刊行されたユダヤ史関連著書で最良の100冊”の一冊に選ばれている。すなわち、ポルトガル語で著述活動を行ったブラジル文学者シクリアルは、20世紀の世界文学を豊穡なものにしたユダヤ系作家たち、ドイツ語圏ならカフカ、カネッティ、英語圏ならソール・ペロー、マラマッド、フィリップ・ロス、サリンジャーといった先人たちの系譜に連なっているといつてよい。

そんな“二足いや三足のわらじ”をはき続けたシクリアルの文学的出発点は、最初の著書『研修医の物語』を上梓した1962年、25歳のときだが、本格的な文学的活動は、小話集『動物のカーニバル』(1968年)と最初の長編小説『ボンフィン戦争』(1972年)を発表した1970年代からだ。新進作家シクリアルが次に取り組んだのが、ユダヤ社会にとってタブーであった、“ポラッカ”問題であった。20世紀初頭から1930年代にかけて、ポーランドなど東欧から多くの貧しいユダヤ系女性が性奴隷としてブラジルやアルゼンチンの“闇市場”へ人身売買されたが、その“生きた商品”の密輸を手掛けたのが、ユダヤ系マフィア組織であった。すなわち被害者も加害者もユダヤ人だったのだ。“ポラッカ”とは本来ポーランド女の意味だが、これが

転意して白人娼婦を指すようになったのは、こうした歴史的背景があったからだ。多くの関連資料を読み込んだうえで、このテーマに取り組んだシクリアルは1975年『水の回流』という小説を書き上げているが、刊行直後、明らかにユダヤ系と思われる人物から「余計なことに首を突っ込むな」と脅迫まがいの圧力がかかってきた由だ。経済界や法曹界などブラジル社会で地盤を固めてきたユダヤ系コミュニティにとっては、この“ポラッカ”問題は“歴史の恥部”として隠しておきたい歴史的ファクトであるからだろう。

彼にとって“ポラッカ”は重いテーマであり続けた故に、1993年、ベストセラーとなった話題作E・ラルグマン『若きポラッカ』のはしがきを彼が引き受けたのだ。ラルグマンの作品は、歴史的事実に基づいて書かれたフィクションであったが、この小説のおかげもあって、歴史社会学者による「ポラッカ問題」を追究する研究書が1990年代になって何冊も上梓されることになったのだ。

このはしがきの冒頭部分を訳してみよう。

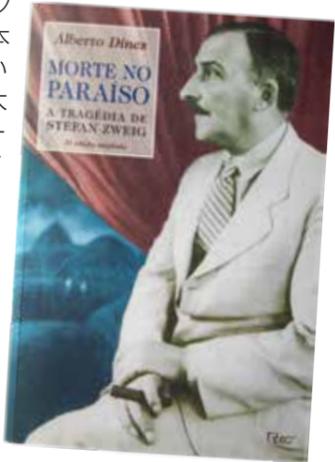
「大学を出たばかりの新米医者だった私は、ポルトアレグレ市のユダヤ系コミュニティが営む老人ホームで臨床医として働いていた。ホームに居住する人たちのなかでも特に一人の女性に私は注目していた。明らかに認知症状が進んでいたものの、彼女は一日中歌っていたり、とにかく快活な女性で、こう表現すると語弊があるかもしれないが、実に“官能的”だった。いつも髪に櫛を入れたり、鏡の前で身繕いしたり、何とも魅惑的な女性だった。診断のため彼女の部屋を訪ねた時の私は、医者というよりも一般訪問者でしかなかった。「先生、素敵なオニサンね。ベッドのここにお座りなさい、ちょっとお喋りしましょう」、という感じで、次はより“進んだ段階”となってしまうかもしれないので、彼女を診断する時は、助手に彼女の体を押さえてもらったりしたものだ。

ホームの他の居住者たちは彼女をのけ者扱いし、言葉も交わさなかった。そのうち、その理由が私にもわかってきた。白人性奴隷としてアメリカ大陸に連れてこられた“ポラッカ”と呼ばれた娼婦の一人だったからだ。」

学者肌の ジャーナリスト・作家 A・ディネス

PUC-RIO(リオ・カトリック大学)や米国コロンビア大学で教鞭をとっていた知性派ジャーナリスト、アルベルト・ディネスは、信念を曲げない骨太の論客にして言葉使い巧みな記者として、様々なエピソードが語られている。例えば、彼がジョルナル・ド・ブラジル紙の編集局長であった1968年12月14日の一面トップ記事。前日の12月13日、軍事政権が最も弾圧的なAI-5(軍政令第5号)を発令し、国会閉鎖、戒厳令発布を強行し、言論弾圧、反政府運動家の一斉逮捕が行われたが、その内容を直球で記事にすれば、即ボツになってしまうので、ディネスの“妙案”は、紙面の一面の上段に天気予報文を突っ込むことであった。その文面は、「Tempo negro, temperatura sufocante. O ar está irrespirável. O país está sendo varrido por fortes ventos. (悪天候=暗澹たる時代、高温=耐え難き気分、息が出来ず=閉塞状況、ブラジルが強風で掃き清められた=ブラジルの国中が正気を失っている)」というものであった。

彼が評伝作家として力量を示したのが、シュテファン・ツヴァイクの生涯を丹念に追いかけた評伝『パラダイスにおける死』(初版1980年、増補改訂版2004年、593頁!)である。ナチズム旋風によって蹂躪された時代に絶望し、二度の故郷喪失を経て自ら「地上のパラダイス」と信じて移住したブラジル(ペトロポリス)で1942年2月23日、自らの命を絶ったツヴァイクの作品群は、今日でもブラジルでも日本でも読まれている。(司馬遼太郎も愛読者の一人だった。)ツヴァイク文学の普遍性を読み解いたディネスの評伝は、ドイツ語に翻訳され、ドイツ語圏でも高い評価を得たのであった。



ディネス『パラダイスにおける死』▲

日本の言語多様性

日本語ポルトガル語バイリンガル話者の調査から

ティム・ラメリス（言語学者、ライデン大学助教授）

いま日本には、日本語に加えて、家庭で使われる外国語（「継承語」）を生まれてから身につけてきたバイリンガル話者がたくさん住んでいる。その中に、ブラジル・ポルトガル語を継承語として話す人も少なくない。そのようなバイリンガル話者は、どうやって日本語とポルトガル語を両立させ、2ヶ国語を話す中で、それらの言語は互いに何らかの影響を与えあっているのだろうか。このような疑問を明らかにするために、オランダのライデン大学の研究者ティム・ラメリス（筆者）が、国立国語研究所の研究者五十嵐陽介と日本ブラジル中央協会と連携し（図1）、日系ブラジル人コミュニティを対象にした言語学的な実験を行った。私たちはこの実験を通じて、日本語・ポルトガル語のバイリンガリズムに関する知識を深めるだけでなく、ブラジル・ポルトガル語が日本の言語的多様性をより豊かにしていることにも焦点を当てたいと思っている。

実験には、日本に住んでいる日本語・ポルトガル語のバイリンガル話者29人が参加し、聞き取り能力と語彙力の測定に加えて、バイリンガル話者の発音の特徴の調査を行った。

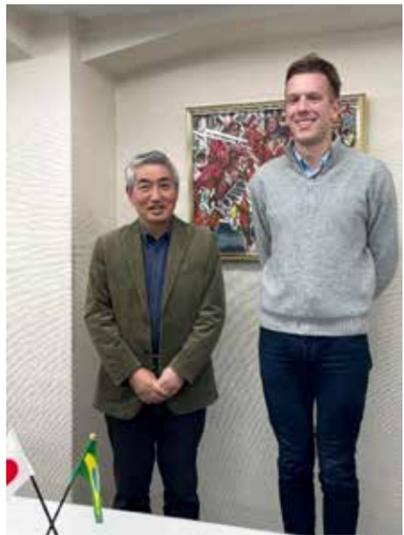


図1：日本ブラジル中央協会の窪田事務局長とライデン大学のティム・ラメリス

バイリンガル話者の発音特徴を明らかにする方法

研究目的の一つは、バイリンガル話者が話しているときに2つの言語がお互いの発音に及ぼす影響を明らかにすることだった。その相互影響を理解するための方法として、「この日本語はポルトガル語っぽく聞こえるか」などの質問をすることは考えられるが、人間が判断するため、あまり客観的に発音の特徴をとらえることができない。そのため私たちは、バイリンガル話者の発音を音響学的に分析することで客観的に計量できる、「挿入母音」という現象に注目した。

日本語とブラジル・ポルトガル語の思わぬ共通点

「挿入母音」とは何かということ、日本語で頻繁に使われる外来語の例を使って説明しよう。例えば、「Facebook」という外来語は、本来英語では /feisbuk/ と発音されるが、日本語では /feisubukku/ と発音され、もともと英語の発音になかった「ウ」という母音が現れる。その母音がなぜ出てくるかというと、英語の発音における /sb/ のような子音がたくさん並ぶ音は、日本語独自の発音ルールによって規制されるからである。自分で Laptop, Starbucks, TikTok などの外来語を日本語っぽく発音してみると、きっと「ウ」という母音が出てくるのではないかと。それらの母音を、言語学では「挿入母音」という。

ブラジル・ポルトガル語話者に、前述の外来語をポルトガル語で発音してもらおうと、/feisibuki/, /lapitopi/, /stabakisi/, /tikitoki/ と発音する可能性が高い。なぜかという、ブラジル・ポルトガル語は日本語と同じように、外来語に子音がたくさん並ぶ場合に挿入母音を入れる「修正戦略」があるからだ。

図2：バイリンガル話者の発音の音響学的分析



ポルトガル語は日本語との系統関係もなく、文法や単語の面では共通点がないが、挿入母音という点では意外と似ているのだ。ただ、ブラジル・ポルトガル語では、「ウ」ではなく「イ」という母音が主に挿入される。

バイリンガル話者が持つ、言語に関する暗黙の知識

人間は、言語独自の発音ルールに関する暗黙の知識を持っている。だからこそ、日本語話者とポルトガル語話者は、子音がたくさん並ぶ外来語に「ウ」または「イ」を入れることで、無意識に不正な発音を修正するのだ。なお、2つの言語の修正戦略を持っているバイリンガル話者が、どちらの言語の戦略をとる傾向があるのかは不明である。日本語の発音ルールに従い「ラップトップ」、「スターバックス」などと発音するか、ブラジル・ポルトガル語のルールに従い「ラッピトッピ」、「スターバッキスイ」と発音するのか。この疑問をもとに、私たちはバイリンガル話者の言語に関する暗黙の知識を解明しようとしてみた。

バイリンガル話者の発音における個人差

発音タスクでは、バイリンガル話者の参加者に /agbo/ や /abno/ など、日本語とブラジル・ポルトガル語の発音

ルールに規制される /gb/ や /bn/ の子音連結を含む架空単語を聞いてもらい、それを日本語またはポルトガル語の文の中で復唱してもらった。その後、「わたしは agbo」と言います」や「Eu falo abno uma vez」などの録音を音響学的に分析し、挿入母音の出現率を計算した（図2）。

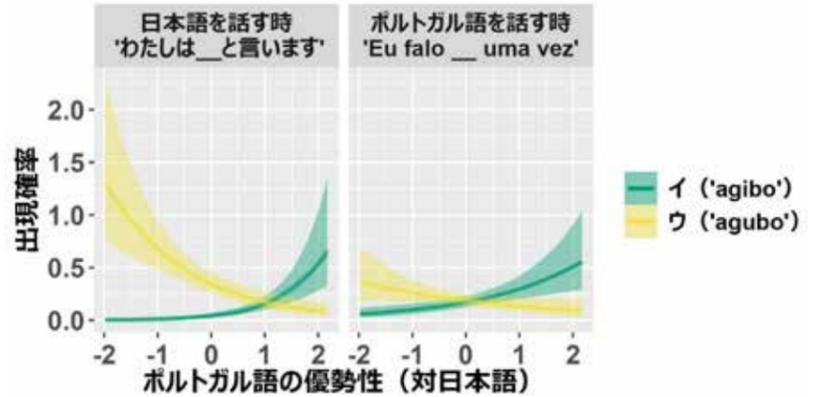
一般的な結果として、バイリンガル話者が日本語で話したときには架空単語を /agubo/ と発音したり、ポルトガル語で話したときには /agibo/ と発音したりするなど、それぞれの言語のルールに従っている傾向がみられた。なお、一部のバイリンガル話者の中には、日本語で話していてもポルトガル語の修正戦略をとり、「イ」を挿入した人もいたため、話者同士の個人差も判明した。

「言語的優越性」の発音への影響

日本語で話しているにもかかわらず、ポルトガル語の発音ルールに従って「イ」を入れていたバイリンガル話者はどのような話者なのかを知るために、私たちは発音における個人差の要因も調査した。その中に、「言語的優越性」という要因があった。言語的優越性とは、ある言語を使い始めた年齢や、一日の中でそれぞれの言語を聞いたり読んだりしている時間など、さまざまな言語背景に関する情報から構成された個人の2つの言語のバランスを表す尺度だ。実験に参加したバイリンガル話者の中には、ブラジルで生まれて日本で育った人や、高校時代をブラジルで過ごし社会人になってから日本に帰国した人や、家庭でパートナーとはポルトガル語、子どもとは日本語を使う人など、多彩な言語背景の人がいた。このような生い立ちや個人の経験から、人それぞれの言語的優越性が構成され、この尺度を使って2つの言葉のバランスを数値的に表すことができた。

図3は、バイリンガル話者が発音タスクで架空単語に「ウ」(/agubo/) または「イ」(/agibo/) を挿入した確率と、個人の言語的優越性との関係を表している。この図から、横軸に左から右へ、ポルトガル語の優越性が高ければ高いほど、ポルトガル語の発音ルールに従っ

図3：挿入母音の出現とポルトガル語の言語的優越性の関係



て「イ」を使う確率が増す結果がうかがえる。この効果は、ポルトガル語で話しているとき（右側）に限らず、日本語で話しているとき（左側）でも見ることができる。要するに、ポルトガル語が優勢な話者は、「わたしはアギボと言います」というように発音しがちで、日本語を話していても無意識的にポルトガル語の発音の影響を受けているのだ。逆に、ポルトガル語の優越性が低ければ低いほど（つまり、日本語のほうが優勢であればあるほど）、どちらの言語でも日本語の「ウ」を挿入する傾向が強い。このように、バイリンガル話者の発音の些細な側面における2つの言語の相互影響が、言語的優越性によって左右されることがわかる。

「状況によって自動的にでます」参加者の感想から伝わってくる日本語とポルトガル語を両立させる日常

発音タスクで判明した挿入母音に関する結果は、バイリンガリズムの根本を理解するために言語学者としておもしろい結果ではあるが、バイリンガル話者の日常にはあまり大きく影響を与えないだろう。今回の実験では、日本語とポルトガル語の些細な発音特徴だけでなく、聞き取り能力と語彙力も測定するタスクを行なってもらうことで、バイリンガル話者が両言語において高い言語力を発揮し、日常的にうまく日本語とポルトガル語を両立させていることがわかった。

実験の終わりに、私たちは参加者個人のバイリンガリズムに関する感想を尋ねた。それらの感想から、2つの言語を両立させる苦労と同時に、言語多様性の大切さと便利さも伝わってきた。例えば、

日本生まれで子どもの頃をブラジルで過ごし、中学生の時に日本に帰国した1人の参加者は「ブラジルに引っ越すまではポルトガル語を自分から使う機会はなく、実際に住み始めた時はずっと黙っていたのですが、母の話によると1週間経った頃にはペラペラに話していたとのこと」と述べた。このような語りや、生まれてから2つの言語が頭の中に蓄積され、すぐに表面化しない場合もあることを示す一方で、言語習得の柔軟性も表している。

もう一人の参加者は「日本語は幼稚園に入園する4歳まで全く話せず（理解もできず）、入園時両親は園長先生に『子どもだから日本語はすぐ覚えますので、忘れてしまわないよう、ご家庭では引き続きポルトガル語で話してください』とされました。そして家では父とは日本語を話し、母や姉とはポルトガル語で話しています」と話した。日本に住んでいるポルトガル語話者の中には、自分の子どもとポルトガル語で話すことに関して心配する人もいるのではないかと思うが、この語りは、子どもだからこそ2つの言語を簡単に身につけることができることを示している。

2つの言語を身につけてきた今回の実験対象となったバイリンガル話者は、日本語とポルトガル語をうまく操り、適宜に使っていることがうかがえる。例えば、ある参加者は「日本語で考えるか、話すか、怒るかなどにおいては、状況によって自動的に出ます」と述べ、仕事や他人との関わりの中で、両方の言語の知識が大変貴重していると話している。今回の研究に参加していたバイリンガル話者が示すように、日本で話されているブラジル・ポルトガル語のおかげで、日本社会がより豊かになるのではないだろうか。

再びデング熱の感染拡大



コッペデひろみ
(音楽家、在伯青森県人会副会長)

気候変動やエルニーニョ現象影響で高音多湿の気候が続いていたことから、南米で蚊が媒介し、急激な発熱、発疹、激しい頭痛、目の奥の痛み、筋肉や関節の痛みなど激しい痛みを伴う「骨折熱」や嘔気、嘔吐などの症状を引き起こすデング熱の感染が例年にない規模で広がっている。これらの症状は感染後4～10日目に現れ、2～7日間続き、デング熱患者の一部は、まれに重症化しデング出血熱（DHF）やデングショック症候群（DSS）が発症する可能性が高くなり、その場合、早期に適切な治療が行われなければ死に至ることも。

今年に入ってから半年でおおよそ560万人以上の感染者がブラジル保健省に報告されており、3,325人の死亡者が確認されている。また、死亡の確認はされているがデング熱感染者なのか未確認の人たちが2,889人もいるのだ。確認がとれたら、デング熱感染の死亡者数は更に増えることだろう（2024年6月3日現在）。

このように、今年の感染者の数は2000年以降で最も多くなっていると記録されている。

さて、2023年3月にブラジル国家衛生監督庁（AVVISA）は、デング熱予防ワクチンとして武田薬品の「QDENG（キューデンガ）」が認可されている。QDENGは、デングウイルスにより発症するデング熱の予防を目的としたワクチンでブラジル保健省は4歳から60歳までを接種対象として承認、民間の一部医療機関では有料で接種が可能とされている。医療機関によるが1回分の費用は500.00レアル、2回（90日後）の完全接種までの費用は968.00レアルである。しかし、2月に公共保健医療施設（SUS）でデング熱の予防接種を無料で行われるようになり、民間医療機関には在庫がないと一部では苦情が寄せられていたようだ。

デング熱患者はどの年齢層でも報告されているが、ブラジルにおけるデング熱の罹患率が最も高いのは10～14歳の小児だ。そのため、SUSでのデング熱の予防接種だが、1月20日に武田薬品より寄付されたワクチンがブラジルに届き、その後ブラジル全5565市町村の中から保健省が選定した521の自治体が対象とされ、10～11歳を対象に接種が行われた。現在は10～14歳までを対象として予防接種が行われている。

現在、ブラジルの季節は冬だが、寒くなったと思ったら翌日には暖くなるから、まさにO Tempo está loucoである。そのため、媒介となる蚊に季節は関係なく、まだ暫く油断は禁物だ。

デング熱感染の75%から80%は家庭内で起きるとサンパウロ市のルイス・カルロス保健長官は述べていた。対策としては蚊に刺されないようにするのが一番だが、なるべく長袖と長ズボンを着用し、外出時には虫除けスプレーや虫除けジェルを塗り、敷地内に水がたまる場所を作らず蚊を発生させないことだ。また、エレベーター内に乗ってきても蚊もいるため、気をつけていても刺されてしまうことがまれにあり、私の夫は他の階からエレベーターに乗ってきたと思われる蚊に刺されデング熱に感染してしまった。

刺されてから6日後、急激な発熱で直ぐに救急病院へ。同時期にCOVIDとインフルエンザも流行っていたため、デング熱に感染したのか、はっきりとわかるのは血液検査のみなので、しっかりと検査をしてもらった。

ところで、血液検査は、発症から4、5日後からは2日おきにすることをすすめられている。理由としては、デング熱感染症疾患後の合併症として一般にギラン・バレー症候群、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）などが知られており、血液検査で白血球の数や、炎症があると上昇するタンパク質の変化を調べるとともに後遺症がないか確認することができるからだ。

日本で行われた免疫性神経疾患調査研究班の全国調査では、年間発症率は人口10万人あたり1.15人と推定され、男女比は3：2で男性に多いため、感染した場合は厭わず検査をしていただきたい。

夫の看病をしてわかったことだが、冒頭に書いた症状以外の症状もあり、COVIDやインフルエンザに感染した時より辛そうだった。完治するまで約15～20日はかかると聞いていたが、夫も同様であり、今は後遺症も特にみられず安堵している。

最後となるが、日本はこれから夏の季節で様々なイベントが屋外で開催されるため、人が沢山集まる場所ではしっかりと対策し、蚊に気をつけていただきたいと切に願う。

新刊書紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『ブラジルの人と社会（改訂版）』（田村梨花・三田千代子・拝野寿美子・渡会環／共編）

初版（2017年）の改訂版。ブラジル社会の最新情勢を歴史的に理解するには最適の書。

新しい節やコラムが追加されており、「パラナ民族芸能祭と移民」、「ペルナンブコ健康なまちづくりネットワーク」、「日本風・日本製ブラジル料理」などのコラムはいずれも読ませる内容を持つ優れた小論になっている。教科書的入門書でもあるが、退屈かつ無味乾燥な教科書文体からはかなりフリーなスタイルで叙述されており、一般読者にもお薦めしたい。

（上智大出版 2024年4月 262頁 2,100円＋税）

『多言語的なアメリカ』（西成彦著）

南北アメリカ大陸諸国において実践されてきた多様な文学活動を長年に亘って学際的に深読みしてきた比較文学研

究者による、驚くべき論考集。文学活動で使われてきた言語は、イディッシュ語、英語、フランス語、パピアメント語、ポルトガル語等であり、その全てを原語や翻訳を通じて読破し、論じた対象は、ラフカディオ・ハーンとカリブ、ブラジル日本文学、ブラジルのユダヤ系文学、「ブラジルという交叉点」等々。著者は博覧強記の超人。

（作品社 2024年4月 274頁 3,800円＋税）

『南北アメリカ研究の課題と展望』

（住田育法・牛島万編著）

米国、メキシコ、ブラジルに関する地域研究の諸課題を論述した一冊。ブラジルについては、クビシェッキ大統領論、ブラジルのシリア・レバノン人移民、ブラジルにおける先住民教育の現状と課題、熱帯ブラジルにおける先住民と黒人の包摂、といった論考が収録されている。京都外国語大学の複数の研究者による共同研究の成果であり、研究対象は多様で論点も一様ではないが、人種主義反対、社会的包摂推進支持といった基本線は一貫している。

（明石書店 2023年3月 286頁 3,000円＋税）

『ビジュアル スペシャルティコーヒー大事典 普及版』

（J・ホフマン著、丸山健太郎監修）

初版（2018年）の改訂版の普及版。コーヒー百科事典としてプロ・アマ問わずコーヒー好きから愛読されてきた一冊。栽培品種、産地、収穫量、コーヒーの「正しい淹れ方」等々、最新情報がアップデートされているが、ブラジルの産地地図がちょっと不完全だ。ロブスタ産地第1位はエスピリトサン州、3位バイア州であるが、この地図には何もマークされていない。豊かな情報を読んで楽しくなる良書だけに、この初歩的ミスは残念だ。

（日経ナショナルジオグラフィック 2023年12月 272頁 税込3,300円）

『収奪された大地』（新装新版）（E・ガレアーノ著、大久保光夫訳）

ウルグアイの作家（2015年没）による、収奪される側からみたラテンアメリカ史叙述。スペイン語原著初版は1971年、邦訳初版は1986年、という古典的作品だが、1980年代は世界各国で広く読まれたロングセラー本。欧米による政治経済支配の歴史を糾弾する著の序文は、「カロリーナ・マリアは、ごみと禿鷹のなかで生まれ、日々の出来事を書き留めた雑記帳が出版されて有名な作家になったが、数年後ごみのなかで死んだ」と書き始める。

（藤原書店 2024年4月 500頁 税込3,960円）

!!「ブラジルあれこれ」!!

建築家西沢立衛氏とオスカー・ニーマイヤー

最近のブラジル人観光客、特に富裕層に人気なのが、瀬戸内アートとして知られる、瀬戸内海の直島、豊島（てしま）といった島々を舞台に展開するアートプロジェクトだ。直島では安藤忠雄氏設計の地中美術館、李禹煥美術館、ベネッセハウスミュージアム、また、豊島では、西沢立衛氏設計の豊島美術館はじめ、いくつかのアートプロジェクトがある。

3月に仕事の下見を兼ねてこれらの美術館を巡ってきた。いずれの島でも美術館訪問を目的に島を訪れる外国人観光客で日に数便しかない町営バスは超満員状態であった。美術館の中では、ポルトガル語も聞かれ、ブラジル人観光客もかなり来ていた印象だ。

訪問前に、豊島美術館や、美術館の設計を担当した建築家の西沢立衛氏について調べていた際、2015年日伯修好120周年記念事業として東京都現代美術館で開催された「オスカー・ニーマイヤー展」の記事が目にとまった。

同展の会場設定は、同氏が、同じく建築家である妹島和世氏とともに、1995年に結成した建築家ユニットSANAAが担当、サンパウロのイピラプエラ公園の1/30の模型が展開され、公園の航空写真がプリントされた絨毯の上を自由に歩き回ったり、寝転んだりしながら自由に鑑賞できる展示として話題になったようだ。私自身は、この時期、パラ州ベレン市で勤務

していた。同展を訪れることができなかったことは残念だ。

ネット上には、多くの関連記事とともに、西沢氏のインタビュー動画が公開されている。ご関心の向きは、ぜひこのインタビュー動画を視聴されることを勧めるが、その内容は、最終、ニーマイヤーがいかに素晴らしい建築家であるか、その代表的作品を紹介しつつ語っており、同氏ががいかに熱烈なニーマイヤー信奉者であるかがわかる。

4月に入り、実際に20名の富裕層の客を直島に案内する機会があった。それぞれに斬新なアートの世界を堪能し、草間彌生氏の「かぼちゃ」作品の前で写真を撮るとするのが楽しみ方の定番になっているようだ。

そのような楽しみ方に加えて、いざさか押しつけがましくもあるのだが、日伯の建築作品の接点を演出すべく、オスカー・ニーマイヤーと世界遺産ブラジリア、日本人にもなじみの深いイピラプエラ公園等ブラジルのすばらしい建築家・作品についての西沢氏の評価もエピソードとして紹介した。

上記のSANAAについては、直島の表玄関宮浦港の「海の駅「なおしま」」、「豊島美術館」以外にも、外国人観光客も多く訪れる金沢の「21世紀美術館」の設計も担当しているので、金沢を案内する際にも使えるエピソードだ。（MK）

電子ゲーム法の成立



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本弁護士連合会在ブラジルで勤務)

1. はじめに

2024年5月3日、電子ゲーム産業の法的枠組みを定める2024年法14852号(以下「電子ゲーム法」という)が成立・施行された。同法は、電子ゲームの製造、輸入、商業化、開発及び商業利用に関するルールを規定するとともに、急成長する電子ゲーム産業のビジネス環境を整備し、この分野への投資を促進するための施策を導入している。また、青少年による電子ゲーム利用に関連するリスクを考慮した措置も規定されている。

なお、同法は、選挙活動においてアニメのパロディなどをSNSに投稿して話題を呼び、若干22歳でブラジルの連邦下院議員に初当選した日系人のキム・カタギリ氏(現在は2期目)が法案を提出したことで注目を集めた。

2. 定義

(1) 電子ゲーム

電子ゲーム法において、「電子ゲーム」とは、以下のものを指す。

- ① コンピュータープログラムとして開発された双方向(インタラクティブ)な視聴覚作品で、プレイヤーのアクションや画面(インターフェース)との相互作用によって画像がリアルタイムで変化するもの
- ② 電子ゲームを実行するために特別に設計された個人用又は商業用のハードウェア及び付属品
- ③ 携帯電話アプリケーションやウェブページで使用するソフトウェア、コンソールゲーム及びダウンロード又はストリーミングによってプレイするバーチャルリアリティ、拡張現実及び複合現実におけるゲーム

なお、お金を賭けるゲームは「電子ゲーム」には該当しないと明記されており、賭けゲームは電子ゲーム法で規定されている各種ベネフィットを受けることができない。また、ファンタジースポーツも電子ゲームには含まれないと解されている。

(2) 電子ゲーム開発会社

電子ゲーム法において、「電子ゲーム開発会社」とは、電子ゲームの制作を目的とする企業を指す。

3. 電子ゲーム法の概要

(1) 許認可は不要である

電子ゲームの製造、輸入、商業化、開発及び商業利用に特段の許認可は不要であることが明記されている。

(2) 産業財産権への登録

産業財産権法が電子ゲーム法により改正され、産業財産権(INPI)に登録できる知的財産権の1つとして電子ゲームが追加された。

(3) 電子ゲームの用途

電子ゲーム法は、電子ゲーム産業を支援するため、年齢区分を設けることを条件に、電子ゲームを教育目的、治療目的、能力開発目的、公告目的などに使用することを許可しており、政府はこれらに関するルールや施策を制定する。例えば、政府が公立学校で使用する教育用ゲームを購入したり、公的資金で制作された電子ゲームを、教育機関、研究機関、医療機関などが無料で使用できるようにすることなどが考えられる。

(4) 優遇措置

- ① 電子ゲーム産業のイノベーションを促進する観点から、電子ゲームの開発に必要な機器(コンピューター、コンピュータープログラム、SDK(ソフトウェア開発キット)など)は、通関の簡素化及び輸入税の恩恵を受ける。
- ② 電子ゲーム開発への投資にも文化奨励法(1991年法8313号)及びオーディオビジュアル法(1993年法8685号)が適用されることになり、これらの法律に基づく優遇措置を受けられることになった。
- ③ 前暦年の総収入が1,600万レアル又は月平均収入が133万3,334レアル(活動期間が12か月未満の場合)までの電子ゲーム開発を行っている個人事業主や会社などに対して特別待遇が与えられる。

(5) 電子ゲーム産業の人材育成

政府は、電子ゲーム産業の人材を育成するために、電子ゲームに特化した専門技術教育コース、高等教育コース、職業訓練所などを創設・支援する。

(6) 青少年の保護

電子ゲーム法は、電子ゲームで遊ぶ青少年を保護するために以下の規定を設けている。

- ① 青少年がアクセスする電子ゲームのコンセプト、設計、管理及び運営は、青少年の最善の利益に基づかなければならず、また、青少年の権利へのリスクを軽減するための適切な方法を講じなければならない。さらに、電子ゲーム開発者は、これらを遵守するために青少年との対話チャンネルを設けるよう努めなければならない。
- ② 電子ゲーム提供者は、そのサービスが、青少年に対するあらゆる形態のネグレクト、差別、搾取、暴力、虐待又は抑圧を助長する環境を作り出さないことを保証しなければならない。
- ③ ユーザー間の交流が可能なゲームは、苦情や告発を受け付けるシステムの提供、苦情を申し立てた人に対する情報提供、課された罰則の見直しを求める手段の提供などを講じなければならない。また、利用規約において、青少年の権利を侵害する行為やコンテンツの交換が禁止されることを規定する必要がある。また、これらの情報をポルトガル語で青少年にも理解できる用語で説明しなければならない。
- ④ ゲーム内で何らかの物を購入できる場合には、青少年による取引を制限するために、初期設定は親又は法定後見人の同意が必要とする形にする必要がある。

MOVERプログラムの概要 ブラジルにおけるグリーン・モビリティ・イノベーション・プログラム



天野義仁
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
責任者)



三上智大
(KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー)



リカルド・ロア
(KPMG ブラジル
税務パートナー)

MOVER の概要

ブラジル政府(以下、政府)は、自動車政策の一環として、法案PL914/2024号を根拠とした、主に新しい動力技術及び脱炭素化に向けた投資を促進することを目的としたMOVERプログラムを設立した。政府は、2029年1月までに最大193億レアル相当のインセンティブを付与する予定であり、その内訳として、2024年に35億レアル、2025年に38億レアル、2026年に39億レアル、2027年に40億レアル、2028年に41億レアルを支出する計画を立てている。これらのインセンティブは連邦税と相殺可能な税務クレジットとして与えられる予定である。

当該プログラムは、自動車セクターの脱炭素化、自動車の燃費効率に貢献する技術開発に向けた投資を促進するための支援策が考案されており、最低限の自動車製造におけるリサイクル率の盛り込み、CO2排出量の少ない自動車に対する税負担の軽減、グリーンIPI(工業製品税)の創設等が含まれる。

MOVERの対象範囲として、普通乗用車、バス、トラック、自転車、道路整備用の機械、トラクターの製造メーカーのほか、自動車部品、システム、自動車セクターに向けた資材を製造する企業等、サプライチェーン全体が含まれる。

同プログラムは2024年5月28日に下院で可決されており、2024年5月31日現在上院で審議中である。法案の成立に先立ち、政府は同プログラムの税務クレジットの認証及び付与のため、企業が行うべき手続きを規定したMDIC省令第43/2024号を2024年3月6日に公布しており、すでに70社以上が承認されている。

プログラムの主な特徴

自動車の販売に関する義務的要件

前身プログラムであるROTA2030では、ROTA2030を適用するために、企業が国内で自動車を販売する際は、車両ラベリングと呼ばれるプログラムに参加し、安全性に関する基準及び「燃料タンクから車輪まで」の排出量を考慮した燃料効率基準を満たす必要があった。MOVERでは基準がさらに厳格化されており、燃料効率基準においては「油田から車輪まで」と呼ばれる、使用される燃料の生産サイクルをもカウントしたカーボンフットプリントを考慮して測定する必要がある。また、ROTA2030に引き続きMOVERを適用する企業は先述のカーボンフットプリントに関する数値を取りまとめたカーボンフットプリントレポートを作成し、提出する必要がある。さらにMOVERプログラムでは、燃費向上と自動車の性能レベルの強化に加え、自動車製造におけるリサイクル材料の要件も満たす必要がある。2024年5月31日現在では、規定は設定されていないものの、50%以上と予想されている。

グリーン課税

現行の自動車に対するIPIの税率はエンジン排気量によって規定されており、排気量が小さいほど税率が低い仕組みとなっている。しかし、MOVERでは、課税方式が変更され、下記の要素を取り入れた税率が定められる予定となる：

- i) 使用燃料
- ii) 燃費
- iii) エンジン出力
- iv) リサイクルのしやすさ
- v) 性能および運転の補助技術

研究開発投資へのインセンティブ

MOVERプログラムは、下記の指標に基づいて、研究開発の投資額に対して50%から320%(つまり、投資額1レアルに対して0.50から3.20レアル)のインセンティブを付与する仕組みとなる：

- i) 製造における技術の成熟度
- ii) 製造活動及び技術のインフラ
- iii) 市場の多様性
- iv) 先進技術及びサステナビリティな技術への投資

一方企業は、自動車製品の販売から得られる純売上高に基づいて計算される、研究開発への最低投資率を満たす投資を行う必要がある：

- i) 普通乗用車：2024年に1%、2029年までに1.8%に増加
- ii) トラック、バス：2024年に0.6%、2029年までに1%に増加
- iii) 自走式機械及び道路整備用機械：2024年に0.6%、2029年までに1%に増加
- iv) 自動車部品、モビリティ及びロジスティクスのための戦略的システムまたはソリューション：2024年に0.3%、2029年までに1%に増加

国産化されていない自動車部品の輸入税に係る軽減恩典

国産化されていない自動車部品の輸入について、製造メーカーは、サプライチェーンにおいて政府が定めた「優先プログラム」に対して輸入総額の2%相当の研究開発プロジェクトを投資することを条件に、国内で類似品がない部品及びコンポーネントへの輸入税の軽減恩恵を受け取ることが出来る。この財源は、BNDES(国立経済社会開発銀行)が管理する国家産業技術開発基金(FNDTI)に投入される。

企業がMOVERを適用する際の主な留意点

MOVERは自動車セクターにおける各企業の投資計画を大きく変える可能性がある。サステナブルな技術を備えた自動車はこれまで以上に重要となり、各企業は製品ポートフォリオと中期的な投資計画を再考する必要があると言える。そのためには、プログラムに係るインセンティブの予測性が投資計画を構築する上で不可欠であり、政府からのインセンティブの細則の制定及び法的安定性の確保が期待される。また、プログラムを最大有効活用するためには、ローカル事業のみならずグローバル事業を念頭に置いた、リスク及び機会の検討が必要となる。

MOVERは、政府への報告義務等、様々な要件を適切に満たすための内部統制の強化といった課題を生み出す可能性がある。企業はプログラムを適用するにあたり、そのベネフィットと見返りに必要となる投資を検討し、最終的な判断を行う必要がある。

ブラジルプデンに魅せられて 四半世紀



中津雄春
(ブラジルプデン研究者)

2023年ブラジルプデンは、クックパッドの「食トレンド予測 2023」海外伝統スイーツ部門に選ばれ、また様々なメディアやカフェ、企業に取り扱っていただき注目された。

この日本で注目されたブラジルプデンは、ココアのスポンジケーキの上にプデンが乗っており正式にはプデンケーキである。日本に居るブラジル人の方がこの二層のプデンを見ると「初めて見た」との声を多くいただいた。この二層のプデンだが、始まりは私が昔働いていた職場で一緒に働いていた日系ブラジル人の職員さんより「ブラジルには二層のプデンもあるんだよ」と教えてくれて作ったものだった。



私は、直ぐにでも作ってみたいと職員さんに「レシピをください」とお願いしたところ、翌日職員さんよりいただいたレシピは全てポルトガル語で書いてあった。

ポルトガル語が読めない私はYouTubeでブラジルの料理番組を見て、見よう見まねで作ってみた。それから数日後、私は表面的に真似て作った二層のプデンを職場に持って行き同僚たちとみんなで試食した。10人くらいで試食したが自ら作ったこの二層のプデンが美味しすぎて一番びっくりしたのは私であった。この日より、様々な場所にこの二層のプデンを持参してプライベートで付き合っていた友人たちに食べて貰い徐々に認知されていくことになった。当時の友人たちは二層のプデンを食べる際に携帯で写真を撮ってはSNSに投稿することがあり、それにより友人を通じて面識のない方からもパーティーへの持ち込みやワークショップ講師の依頼をいただくこととなり、その後に清澄白河のカフェにてデザートメニューにしたいとの依頼をいただいた。

それから約10年経ち私が二層のプデンをレシピ提供したカフェは7軒ほどになった。2023年これほどまでに二層のプデンが取り上げられた理由のひとつは、新型コロナウイルス感染拡大による巣ごもり生活の影響がある。当時、家にいる時間が多くなった人たちがクックパッドを見て「作ってみたい」と興味を持ったのがこの二層のプデンだったとのことで、2021年にレシピ検索数が跳ね上がったと聞いている。いま、Instagramではタグ「#ブラジルプデン」

で検索するとカフェを始めとして自宅でも作られた二層のプデンの投稿が多く見られるようになってきた。2023年は、この二層のプデンが注目となったが、私の気持ちとしては「一番おいしいプデンは（二層のプデンよりも）コンデンスミルクたっぷりのシンプルなプデンです」であった。

私がブラジルプデンと出会ったのは、1998年、千駄ヶ谷外苑西通り沿いにあったブラジルレストラン「サバス東京」だ。当時好きになり始めていたブラジル人ミュージシャンのベベウ・ジルベルトのライブがサバス東京で行われると聞きチケットを購入した。当日はディナー（シュラスコ）付のライブでした。ホメロ・ルバンボのギターにベベウの歌声を聴きながらシュラスコを食べて気持ちもお腹も満たされて、最後に出てきたのがデザートプデンであった。サバス東京のプデンは、角ばった長方形でプデンの上にはたっぷりのカラメルとブルーベリーが乗っていた。そこで初めて食べたプデンは衝撃であった。「かったーい!! (固い)」「あまーい!! (甘い)」「びっくりしてしまった。プデンにスプーンを入れ込んだ時の手に伝わる固さ、そして口に入れたときの濃厚さとカラメルも併せて甘い!! であった。ベベウ・ジルベルトのライブももちろん感動だったのだが、その日よりこのサバス東京で食べられるプデンが忘れられなくなりランチもディナーも何度も通って食べるようになった。毎回、「なんでこんなに甘くしなきゃいけないの?」って思いながらもプデンを頼んで食べていた。

それから数年後、「サバス東京」は「コバ東京」と名称を変えて営業していたが閉店してしまうこととなった。当時、そのほかのブラジル料理屋にはほぼ行ったことなかった私は「プデンが食べられなくなる」と残念な気持ちと困ったとの気持ちになったが、その後に「(プデンを)食べたいならば自分で作ればよい」との思いになり、その日から作り始めた。作り始めた当時、家族や甥っ子、姪っ子に自作のプデンをたくさん食べて貰って感想を聞いていたのは今でも良い思い出である。いま日本では二層のプデンを引き続き取り上げていただいているが、いつか「サバス東京」で食べたようなシンプルなプデンが注目されて、各家庭でもお母さんが作るおやつのひとつとしてポピュラーなものになったら、それが一番うれしい。



●アルキミン副大統領の中国公式訪問

中国を公式訪問中のアルキミン副大統領（兼商工開発相）は6月7日、習近平国家主席と会談し、その席上、リオグランデ・ド・スール州の復興支援を含むインフラ融資協定（総額264億レアル、約7900億円）を発表した。また、アルキミン氏は、ブラジルと中国の商業パートナーシップの重要性について強調した。

習近平国家主席は「中国とブラジルは、同じ意志と向上心で共に前進するパートナーであり、兄弟だ」と発言し、さらに「中国とブラジルの関係は二国間の範囲を超え、発展途上国の協力、世界の平和と安定を促進し、団結を確立するモデルとして機能する」と述べた。

●大統領選候補に関する世論調査

Quaest社が5月2日から6日にかけて、2045人を対象に実施した世論調査によると、「ルーラ大統領には再選される価値があると思うか」との質問に対する答えは、「ノー」が55%で、「イエス」の42%を上回った。但し、「ルーラとレイタス・サンパウロ州知事（Republicanos）が大統領選で争った場合、誰に投票するか」との質問では、ルーラが46%で、レイタス（40%）を上回るとの結果が出た。但し、ルーラがレイタスに勝てるのは北東部だけで、他の地域ではレイタスに負けるとの結果が出ている。ま

た、「ルーラの対抗馬には誰が最適か」との質問に対する回答は、ミシェーレ前大統領夫人（PL）28%、フレイタス知事（Republicanos）24%、ラチーニョ・Jr・バラナ州知事（PSD）、ゼマ・ミナスジェライス州知事（Novo）7%、カイアド・ゴイアス州知事（União Brasil）5%、分からない/無回答26%となっている。（5月13日付ヴァローラ・エコノミコ電子版）

●アモリン大統領補佐官、中国訪問

アモリン大統領補佐官は5月23日、北京において、王毅外交部長と会談し、ウクライナ紛争を政治的に解決するための和平会議（首脳級）の開催に向けて取り組むことで一致した。アモリンのスタッフによると、両国は今後、友好国に対し、和平会議の開催を呼び掛けることになる。アモリンは、中国政府の招きにより同国を5月21日から1週間の予定で訪問している。（5月24日付フォーリャ・デ・サンパウロ）

●森林伐採の年次報告書

NGOのMapBiomasが発表した「ブラジルにおける森林伐採の年次報告書」によると、昨年、アマゾンの森林伐採は、2022年と比べて62.2%減少したが、セラード（特にMatopiba地域）は、逆に68%増加した。（5月29日付コレイオ・ブラジリエンセ）

ジャーナリストの旅路

アイルトン・セナ、栄光は永遠に

高木勝悟
(共同通信サンパウロ支局長)

1994年に自動車レースF1の伝説的なドライバー、アイルトン・セナがレース中の事故で亡くなって今年5月1日に30年を迎えた。出身地サンパウロにある墓地には多くのファンが集まって死を悼んだ。

事故当時、名古屋市で生まれ育った私はまだ子どもで、近所の人が大騒ぎしていたのを覚えている。ホンダのエンジンを搭載したマクラーレンなどで活躍し、F1ブームの火付け役にもなった日本と関係の深い人物なのだが、私は死去以降、セナのことを意識する生活は送ってこなかった。思い出すことになったのは、自分の年齢がセナの34歳をとうに過ぎ、経済部で自動車業界を担当していた時。ホンダの社員から「ブラジルに行くとセナの墓を訪れる社員は今も多いです。ぜひ行ってみてください」と言われたことがきっかけとなった。

今年1月にサンパウロに赴任し、空港から市中心部に向かう途中で、セナの名前が付けられた道路を車で走った時に心が揺さぶられたが、まだ始まりに過ぎなかった。街には多数の壁画や像があり、名前を冠した地下鉄駅や広場もあり、パウリスタ通りの路上で絵画も売られていた。人々の記憶の中で生き続けているようだ。

国葬が営まれたことでも分かるようにセナは国民的な英雄だ。セナが活躍していた当時、ブラジルではサッカーと肩を並べるくらいF1の人気の高かったようだ。死去から約2カ月後、米国で開催されたサッカー・ワールドカップでブラジルが優勝した際、ブラジル代表の選手が、セナの名前と「4回目の優勝は私たちのもの」と書いた横断幕を掲げて追悼したのも印象的だ。

サンパウロで、さまざまな人にセナにまつわる話を聞いたが、セナのことを悪く言う人には会わなかった。死去のショックで今もF1を見ることができないう人もいた。タクシー運転手に車の中でセナにまつわる思い出を聞いていた時、急に話を止めてどうしたのかと思ったら、涙目になって言葉に詰まっていた。ファンの悲しみは消えていない。

街の喧噪から離れたサンパウロ南郊のモルンビ墓地。よく手入れされた芝生の中央に立つ木の下に、きれいな花が飾られたセナの墓があった。墓地の管理人によると連日世界中からファンが訪れるという。セナはこの30年、墓地のある丘の上からサンパウロの街や人々を見守ってきたのだろう。きっとこれからも。そう願って静かに手を合わせた。

歴史人類学者リリア・モリツ・シュワルツ教授 ABL(ブラジル文学アカデミー)新会員へ

岸和田仁 (『ブラジル特報』編集人)

今年3月7日、歴史人類学者リリア・モリツ・シュワルツ(1957年サンパウロ生まれ、サンパウロ大学教授、プリンストン大学客員教授)が、ブラジル文学界のエスタブリッシュメントといえるABL(ブラジル文学アカデミー)の新会員に選出された。



1897年、文豪マシャード・デ・アシスによって創設されたABLは、長年に亘って男性支配が続いていたが、創設から80年経った1977年、最初の女性会員が誕生した。ノルデスチ文学運動の中心人物の一人であった作家ラケル・デ・ケイロスが、その女性会員第1号であった。それから47年目の今年になって選出されたリリア教授は女性では11番目である。現在のABL(定員40名)のうち4名が女性となったので、ちょうど女性比率が10%になったことになる。

リリア教授は人類学者として数多くの著作を発表してきたが、最近では、作家モンテイロ・ロバトの評伝やブラジル史概説書など浩瀚な歴史書を次々と刊行する歴史叙述者となっている。この辺りが評価されて文学アカデミー会員になったのであろうが、筆者も彼女の主要著作は目を通してきているので、彼女のいくつかの作品についての私のメモを重ねてみたい。

若き人類学者の誕生

彼女のデビュー作『モノクロ写真』(1987年)は、1870年代から1890年代にかけて発行されていたサンパウロの新聞各紙の社会面を読み込んで、当時の支配エリート層が黒人に対して抱いていた偏見の実相を明らかにした著作(修士論文に加筆)であったが、筆者も、著者の文章力というか読者を惹き込む表現力に感心しながら読んだものだ。新聞の社会面を史料として活用する手法は、日本でも柳田国男が先駆的に用いており、その成果として『明治大正史 世相編』という名著が生まれたが、ブラジルの歴史人類学では、ジルベルト・フレイレが『19世紀ブラジルの新聞広告における黒人奴隷』(1963年)で同手法を援用している。彼の場合は、主としてペルナンブーコの新報を読み込んで、19世紀の黒人奴隷の実態に迫ったのだ。

博士論文に加筆したのが、第二作『人種のスペクタクル』(1993年)で、これは、19世紀後半から20世紀前半まで、当時のブラジルの科学博物館、歴史地理研究所、知的エリート養成機関(レシーフェ法科大学、サンパウロ法科大学、パイア医科大学)等

における混血人種劣等論研究の実態を関連史料を読み解きながら、明らかにしている著作である。刊行当時の主要紙誌の書評欄では大きく好意的に取り上げられていた。

新書版 『ブラジルにおける人種主義』 (2001年)

この新書版でリリア教授は、まず、ブラジル史を人種の視点から復習し、最近の国勢調査のデータの読み方から、人種差別を禁止する法律の内容説明を経て、人種デモクラシーが如何に“脆弱なデモクラシー”であるかを明らかにしていく。そのさわり部分を訳してみよう。

「ジルベルト・フレイレの『大邸宅と奴隷小屋』によって人種混濁への寛容な見方が広まったことから、様々な文化構成要素の非アフリカ化が進むようになり、そのプロセスと並行して、公的なスペースにおいて「混血がナショナルなものに転化」した。例えば、以前は「奴隷の食べ物」として知られていたフェイジョアードが、1930年代に入ると、「国民食」に昇格し、人種混濁をシンボリックに象徴する代表料理の地位を得ることになった。黒フェイジョン(インゲン豆)とコメが、ブラジル国民を構成する二大人種(黒人と白人)を隠喩的に意味し、そこに、森林の緑を象徴するコウベ(ケール)と、金色を象徴するオレンジが加わって、フェイジョアードが完結する。

フェイジョアードの例だけではない。1890年の刑法では犯罪と規定され、19世紀末まで警察によって弾圧されていたカポエイラも、1937年に国民的スポーツとして正式に認知された。同様に、社会的に疎外されていたサンバも正式に国民文化となり、1935年からエスコラ・デ・サンバのパレードが正々堂々と街頭で行われるようになった。」

サンパウロ大学が行った社会学調査では、面談を受けた98%の人が「自分は人種偏見を持たないが、何らかの人種差別行為をやっている人を知っている」と答えている。ブラジルのような不平等な格差社会においては、“人種”とは、ある時は社会的排除を意味し、またある時は文化的同化を象徴したりする。すなわち、ブラジルの人種デモクラシーというのは“神話”でしかなく、ブラジルの現状は“ブラジル流人種主義”といわざるを得ない。と、主張したのが、この新書版であった。

ちなみに、リリア教授の配偶者ルイス・シュワルツは、かつてはブラジリエンセ出版社の辣腕編集者、今は、ブラジルで一番勢いのある出版社 Cia. das Letras(文芸出版社)の社主・編集責任者だ。このユダヤ系知性派カップルのおかげで、ブラジルのアカデミズムも出版界も活性化したことは間違いない。筆者もその恩恵に浴した一人である。



エミレーツ航空が、 南米を近くする。

FLY BETTER

エミレーツ航空は、サンパウロ、リオデジャネイロ、南米のブエノスアイレスを含む全世界150以上の都市に就航。シームレスな乗り継ぎで、よりスムーズで快適なビジネストラベルをお楽しみください。

ワンランク上の空の旅へ。エミレーツ・ビジネス



*リオデジャネイロへのフライトは、2022年11月2日より運行開始。

水泳・競泳
HIROKO
MAKINO

マラソン
YUKI
KAWAUCHI

スキー・ジャンプ
RIKO
SAKURAI

パラ水泳
CHIKAKO
ONO

パラ陸上(やり投げ)
TAKUYA
SHIRAMASA

車いすバスケットボール
AMANE
YANAGIMOTO

車いすバスケットボール
KEI
AKITA

ワクワクするような挑戦を

あいおいニッセイ同和損害保険は、挑戦するアスリートとともに成長していきたいという想いのもと、
全社員が一丸となって、スポーツ支援を行っています。

立ちどまらない保険。

MS&AD あいおいニッセイ同和損保



CAFÉ
**FAZENDA
ALIANÇA**
SPECIALTY COFFEE
SINGLE ORIGIN



Encantando os paladares mais exigentes
O café produzido no município de São João da Boa Vista que fica na região centro-leste de São Paulo, pelo empresário Renato Ishikawa, é cuidadosamente elaborado a partir de grão 100% arábica, selecionado a cada lote e possui certificados internacionais de qualidade (Rain Forest Alliance e UTZ), e além disso, preocupado com a proteção ambiental, preserva 30% da mata virgem onde a exigência legal é de 20%.

コーヒーを愛する人への極上の一時
サン・ジョアン・ダ・ボア・ヴィスタ市(サンパウロ州の中央部)で、日系実業家石川レナト氏の農園で生産されたコーヒーは、ロットごとに選別された100%アラビカ豆から丁寧に作られており、厳しい国際的品質証明書(レインフォレスト・アライアンスとUTZ)を取得しています。さらに、環境保護法でコーヒー農園に課せられている20%の森林保全に対し、30%を保全し、環境にも配慮しています。

日本代理店
ミカド珈琲店 日本橋本店
ミカドコーヒー 日本橋室町三井タワー店
ミカドコーヒー 軽井沢旧道店
ミカドコーヒー 軽井沢 プリンスショッピングプラザ店
ミカドコーヒー 軽井沢ツルヤ店(スーパーツルヤ軽井沢店)
株式会社ミカド珈琲商会
サザコーヒー筑波大学アリアンサ店
オンラインストア <https://mikado-coffee.com>

住所
東京都中央区日本橋室町1-6-7
東京都中央区日本橋室町3-2-1, 日本橋室町三井タワー5階CAFE & BIZエリア
長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢786-2
長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1178-798
長野県北佐久郡軽井沢町長倉2707
東京都港区三田2-21-8
茨城県つくば市天久保3丁目1

ブラジル・サンパウロでお住まいをお探しでしたら
 コジロー出版不動産部にお任せください

日系進出企業の駐在員が多数住むサンパウロ市パライゾ地区の
 優良アパートをご紹介します。

内覧からオーナーとの交渉、契約書締結、お部屋のリフォーム
 家具の購入、入居手続きの立ち会いまで全て日本語でサポートいたします。

フラットホテルの手配も行っております。

ブラジルへ渡航される前にお気軽にお問い合わせください。

↓ お問い合わせ（日本語でどうぞ）



LINE +55 (11) 99478-2433

✉ ed.kojiro@gmail.com

ふせなおすけ
 担当 布施直佐（不動産仲介業者）
 不動産業者協会登録番号 (CRECI)
 258600-F

物件の写真はこちらでご覧になれます → https://note.com/pindorama_re | [@pindorama.real.estate](https://www.instagram.com/pindorama.real.estate)

Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
 TEL: 03-5826-1538
 TOKYO-TO TAITO-KU
 NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
 TEL: 03-6402-5685
 TOKYO-TO MINATO-KU
 SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F



Leading
 You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様にも万全のサポートをご提供しています。

**NISHIMURA
 & ASAHI**

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



www.nishimura.com

お問い合わせ

latinamerica@eml.nishimura.com

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也
 ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf
 Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta*1 Kuala Lumpur*1 New York Singapore Taipei Yangon *1 Associate office

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

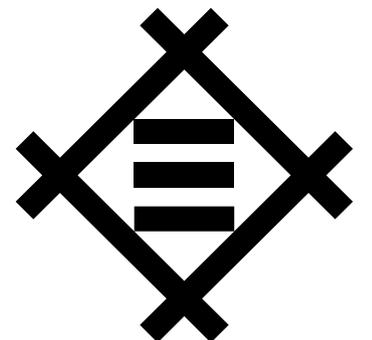
現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、増産や品質向上に貢献。

[Business innovation-3]

自動車リースで、社会をもっと便利に、もっと豊かに。

中南米最大の自動車市場ブラジルで、トヨタと共に B to B 向けリース事業“KINTO”を展開。
カスタマイズ自在のサービスで、社会全体の「保有」から「利用」という動きに応える。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.